

## 政治諷刺と anarchism

——*MacBird!* の場合——

宮 井 敏

*MacBird!*<sup>1</sup> が生まれた動機は、作者 Barbara Garson が1965年8月の California 大学での反戦集会で “Ladybird Johnson...”<sup>2</sup> というべきところをうっかりして “Lady MacBird...” といふまちがえたのがヒントになったといわれている。“MacBird” は “Macbeth” と “Ladybird” の重なったものだから Mrs. Johnson に Lady Macbeth の姿をダブらせて見るとすればどうであろうか、だとすれば、Lyndon Johnson は当然 Macbeth その人でなければならず、John F. Kennedy は Scotland 王 Duncan ということになり、Kennedy 王朝をつぐものが Robert, Edward だとすれば、Bob は Malcolm, Teddy は Donalbain ということになる.... かくして構想は果てしなくふくれ上がり、Shakespeare に仮託して現代アメリカの問題状況をえがいてみせようという parody *MacBird!* はこの世に生まれ出ることになったのである。

諷刺の意図はあきらかである。いかにこの *MacBird!* が *Macbeth* の Duncan 王暗殺の story を下敷きにしているからといって、そしてまた、いかにかの *Warren Report*<sup>3</sup> をめぐってダラスの神話がさゝやかれているように、まさか今日、直接にせよ間接にせよ、Johnson が何らかの形で Kennedy 暗殺事件にかゝりがあり、作者の意図はまさにその事を指摘するにある、と考える観客、読者はあるまい。第一幕七場で群衆の一人が Ken O'Dunc の姿をみて、あたりのどよめきに逆らって、「あいつだってそこいらの政治家と同なじことさ」 (“Aw, hell! He’s just a politician like the rest!” I, vii.) と叫んだり、黒人に紛した witch が「白

人の政治家なんてどいつもこいつも似たようなものさ」 (“Yeah, white politicians. They all look like.” IV, ii.) と喚いているのをみてもわかるように、作者の意図は、*Macbeth* における Shakespeare の意図とはちがって、MacBird も Ken O’Dunc も、Bob-cat もひっくるめて、権力の周辺にあるすべての政治家たちのあくなき権勢欲と、権力獲得のための争いから生じる一切の政治悪とを示してみせるにある。そしてさらにすゝんでは Kennedy と Johnson, Ken O’Dunc と MacBird というあまりにも典型的に対照的な二つの性格をあざやかに対比させることによって今後者によって指揮されている現代アメリカ社会の究極的な方向を、現実のさまざまな事件に対する topical allusions を通してあきらかにするにある、とみることが出来よう。

話の筋は簡単である。MacBird は民主党全国大会で大統領候補に決定した Ken O’Dunc の下で副大統領候補にえらばれる。John の弟 Robert は極力反対するがとりあげられない。三人の魔女たちから、「マクバード万歳、上院の院内総務」、「副大統領万歳」、「将来の大統領万歳」と呼びかけられた彼の胸の中には次第に大統領の椅子への野望が生まれてくる。一方戴冠式をすませた Ken O’Dunc は MacBird 夫妻に招かれてテキサスの彼等の牧場にやってくる。パーティーのあとのパレードが、「背景左手に6階建のビルがそびえ、右手に草の丘<sup>4</sup>と鉄道の陸橋のある」ところへさしかゝったとき、群衆の中から“Oh, no!”という悲鳴がおこり、Ken O’Dunc は暗殺される。首尾よく大統領となった MacBird は就任後、最初の仕事として The Earl of Warren に、「ことをあきらかにするためではなく」、「疑惑をおさえてしまうために」、暗殺事件の報告書作成を命じる。また Viet-Land での反乱の知らせを聞くと McNamara 卿に向って徹底した鎮圧を命じたりする。一方錯乱した Lady MacBird はエアゾルの噴霧器であちこちの血の匂いを消してあるく。「力の論理を貫ぬく野卑な男」である一面、「世評を気にする田舎者」でもある MacBird は Ken

O'Dunc の弟 Robert の復讐をおそれて三人の魔女のところへ予言を聞きにゆく。「脈うつ心臓と人間の血をもつものが現れない限り」、「燃える森が Washington を襲うまでは」王座は安泰だと聞かされて再び自信をとりもどす。一方 Robert は Stevenson 卿 Egg of Head<sup>5</sup> に対して積極的な協力を求めるが彼の急死にあい途方にくれる。Wayne of Morse<sup>6</sup> 卿を先頭にした黒人、労働者、Eastern Establishments などの反 Mac-Bird 勢力が次第に力を得、対決をせまる。MacBird は witches の予言を信じて楽観していたが、Washington, Potmack の桜並木が黒人達に焼打されたと聞いて愕然とする。Robert と MacBird との対決。「鋼鉄と plastic の tube で出来た精密機械」が Robert の心臓だと聞かされておどろく MacBird 目がけて Robert が槍を投げつける。「吾が友よ。悲劇的なめぐり合わせで余はこの忌わしき日に大統領となる」という Ken O'Dunc 横死直後の MacBird の inaugural speech とまったく同じ言葉で Robert が演説をして劇はおわるのである。

さて parody としてのこの drama の巧みさは、一つには以上の梗概からも明らかなように、現代の政治機構における bucket-passing of powers を satirize しようという作者の意図が original である *Macbeth* の plot の展開の上に見事に生かされているという事と、今一つ、*Macbeth* のみならず、*Henry V*, *Julius Caesar*, *Henry VIII*, *Richard II*, *Hamlet*, *Richard III* などのさまざまな Shakespeare の作品から適当な詩句を状況に応じて縦横に引用して来て、しかもそれを現代のアメリカでの現実の出来事とうまく照応させている点にあるとおもわれる。

たとえば、I, ii の冒頭のところで Robert が、儀礼的にもせよ Mac-Bird を副大統領候補に推そうという兄 Ken O'Dunc の意見に反対して、「彼はふとっているのにひもじそうだ。あゝいう男は危険だ」という。  
 (“He has a fat, yet hungry look. Such men are dangerous.” I, ii.)  
 これは *Julius Caesar* に出て来る Caesar のことば、“Yond Cassius

has a lean and hungry look.... such men are dangerous.” (I, ii.) の burlesque imitation なのであるが、このドラマではこれが手始めとなつて、MacBird の Robert に対する敵対感情を生み、“This Lord of Law be blasted, There’s the rub.” I, iii.) (cf. *Hamlet*, III, i.), 暗殺事件以後の Robert の反 MacBird 勢力の結集となり (II, iii.) (cf. *Macbeth*, V, ii.), 公然たる宣戦布告 (III, iv.) (cf. *Macbeth*, V, viii.) から last scene での両者の対決とつながってゆくわけである。これを現実の政治情勢の中で照合してみると、民主党大会における副大統領指名をめぐるいきさつの中で、当時 campaign chairman であった Senator Robert Kennedy が Lyndon Johnson を推すという兄の案に強く反対していた事は今では周知の事実であり、Arthur Schlesinger jr. の *One Thousand Days: John F. Kennedy in White House* の中にもくわしくのべられているところである。また、ダラスでの暗殺事件直後に始まる Robert を中心とする the Kennedies と L. B. J. group との間の反目は William Manchester: *The Death of a President* にもあきらかな通りかなり露骨なものがあり、1966年2月19日の上院での Robert の Viet-Nam 政策批判以来、大統領選挙出馬声明にも見られるように、両者の仲はもはや公然たる敵対関係に入ったとみられているほどなのである。

また、III, i. で MacBird が不眠を訴える (“My lord, to bed? You know I dare not sleep. Forgive me, I forgot your malady”) のは original の “Methought I heard a cry, Sleep no more! Macbeth does murder sleep!” (II, i.) の caricature とみられようが、President Johnson その人の insomnia は別として *Washington Daily News* が報じた、大統領が眠られぬまゝに深夜、それもカトリックの教会で、令嬢の Miss Lucy (今の Mrs. Nugent) と祈りをささげたという episode とを考え合わせると甚だ興味深いものがある。

III, iv. の宮中大広間の場はほとんどそのまゝ original の III, iv. の

parody なのであるが、この箇所は *Hamlet* の III, ii. になぞらえて劇中劇が挿入されており、その後で、MacBird が錯乱して切角の party がめちゃめちゃになってしまうくだりがある。この passage は1966年秋の、大統領文化関係顧問 E. F. Goldman<sup>7</sup> 提案による大統領主催芸術関係者懇談会の散々の不評と照応しているものと見ることが出来るが、Pulitzer prizer の Robert Lowell が「アメリカの Viet-Nam 政策の同調者とみられたくないために」招待を断わったのを始めとして、John Hersey が speech の中で、アメリカの Viet-Nam 政策を公然と批難したり、Saul Bellow が欠席した Lowell の行動を支持する声明を朗読したりするというさんざんの有様で、Johnson は不興げに早々退席してしまったといわれている。

この外、「昨夜東の王国がくらやみにつままれた」(“Last night the Eastern Kingdom blackened over.” III, i.) とあるのは、1965年11月9日の午後5時28分から15時間にわたって東部8州をおそった例の “Black Out” をさすとみられること、「国民祈禱の日をつくってこの国最高の聖職者に祈らせよう」(“I plan to call a National day of prayer. We’ll get the biggest preacher in the country.” III, i.) というのは、Viet-Nam 前線の米軍将兵を慰問した際に、「Viet-Nam 戦争は文明をまもるための戦いだ」、「勝利以外の解決は考えられない」などと発言したために Catholic 教会内部でも物議をかもした故 Cardinal Spellman<sup>8</sup> をさしていること、Black Muslim に紛した witch が「爆破した教会、燃やした十字架、さあほうりこめ釜の中に」(“Bombed-out church and burning cross. In the boiling cauldron toss.” II, ii.) と叫ぶ burning cross とは Ku Klux Klan の秘密の儀式に用いられる小道具を、また bombed-out church というのは1964年6月の Mississippi 州 Meridian での Black Moslem による教会焼打ち事件をさしていること、および MacBird の執務室で、ブレーン達が「同盟諸国がオーストラリア併合に反対している」

(“Now, what about these letters from our allies, Opposing annexation of Australia?” III, i.)と話しているのは、故 Harold Holt 豪首相の率いる自由党連立内閣のとって来た排英親米政策とその Viet-Nam 協力に対する英連邦諸国の反撥を意味するとみられること、などがアメリカの政治状況にからむ topical allusions として上げられよう。

さてでは、MacBird その人はどのような人物として描かれているのであろうか。彼は大柄であごの張った、テキサス訛りを喋る男であり、学歴劣等感に悩み<sup>9</sup>、(“A boy who nearly dropped from school.” I, iii.), すべて computer で事がはこばれる大統領選挙戦に腹を立て、(“With forty years campaigning 'neath my belt, They turn from me to mind a damn machine.” I, iii.), 書生ふぜいの大統領顧問団を軽蔑し(“Our ancient counsellors yeild to college pups.” I, v.), ヨット船上のパーティーと外国語の会話に反撥し(“...I am not cut out for merry meetings, for fancy foods and poetry and lutes.” I, v.), Ken O'Dunc の雄弁には負け目を感じ(“You greet our fork-tongued guest.” I, vi.) 記者会見を嫌い<sup>10</sup> (“Now, how to make one interview show that...” II, ii.), 権勢を誇示し(“The world is gonna be his private garden.” II, ii.), 不評に動揺し(“... destroy dissent. It's treason to defy your President.” III, i.), 復讐の恐怖におののき(“What must I fear? How steady is my throne?” III, ii.), 妥協を好み、大衆を避け、目的のためには手段をえらばず<sup>11</sup>、強きを助け弱きを挫き<sup>12</sup>、無原則で<sup>13</sup>、強圧的で、秘密主義的で、没倫理的<sup>14</sup>で、優柔不断で<sup>16</sup>、反知性的な気の弱い、しかし傲慢な男として、全篇にわたってくまなく描かれているのである。

こゝに示されている MacBird のさまざまな性格なり気質なりはおゝよそつたえられる Lyndon Johnson その人の caricature であると見る事が出来るが、作者の諷刺の意図はさらにこの MacBird と Ken O'Dunc とを対比させることによって、いわば Johnson 的性格と Kennedy 的性

格とを対照的に浮彫りにしてみせることにあるようにおもわれる。ヨーロッパ的教養を身につけた J. F. K. と、テキサス人気質まる出しの L. B. J. とではまさに両極端のコントラストをなしているわけであるが、Kennedy が広い国際的視野に立って一つの理念を掲げて政治を行なう型の政治家だったとすれば、Johnson のほうはもっぱら議会の操縦を得意とする政党人であり、一が何等かの創造的な価値を追求してゆくタイプの人物だとすれば、一は説得と妥協による eclecticism を本領とする人である。前者の背後には金融資本を中心とする Eastern Establishments があり、後者の背景には石油産業を中心とするテキサス新興資本の台頭がある。JFK が Harvard 出身のいわゆる Kennedy boys を Task Force として率いれば、LBJ は老練な Texas politicians を cronies としてしたがえる、というわけである。この less conservative な idealist と、less progressive な realist のことを *New York Times* の James Reston は “what to do” に重点を置く人と、“how to do” にしか関心を示さない人のちがいだと云い、英紙 *Observer* の Michael Davey は、「全体的な design を考えて設計する建築家と、施工監督する技術者、それも米国史上最大の技術者」の差であるという。神に仕える prophet と priest の関係において、今アメリカ合衆国を神におき替えていうならば、これは予言者の知性と祭司的知性との contrast であろうし、清水幾太郎氏の表現を借りていえば、これはまた「価値インテリ」と「実務インテリ」とのちがいということにもなる。

さて作者はこうした比較対照によって、主人公 MacBird の姿を通して没倫理的、反知性主義的な Johnson 的性格が国家という巨大な権力機構を支配することの危険を明らかにしたいのであろうが、もちろんだからと云って、彼女が contrast として対置されている一方の Kennedy 的性格に対して何らかの sentimental な憧憬と哀惜の念を告白しているわけでは決してなく、むしろ、この種の性格が今一方にくらべて相対的に少しは

favourable なものであるにもせよ、そこに依然として内包されている征服慾、野心、権力主義といったものに対しては、前者に対するのと全く同じぐらいに鋭く反撥しており、この類型の中の好ましからざる面を増幅したものが、まさに Robert Kennedy, 劇中の Bob-cat であり、篡奪者 MacBird をはきんで、野望と権勢欲の王朝的継承が行なわれると見ているのである。かくして Ken O'Dunc (A) と MacBird (B) という対照的性格、Ken O'Dunc (A) と Bob (A') という相似的性格とをひっくめて、政権は A—B—A' と移動したわけであり、このような権力の bucket-passing という現象、および A, B, A' という三つの personality から共通項としてとり出される political evil というものとの反体制的対決が、この作品の諷刺の基調としてここに明らかになって来たわけである。

こうした政治悪はしかし乍らその存在を可能ならしめる社会機構や精神的風土が当然前提として考えられるわけである。「悪の華」は土壤を得てはじめて開花するからである。例を議会制度に見てみよう。議会政治そのものは人類が長い年月にわたる試行錯誤を経て学びとって来た一つの貴重な文化的遺産なのであるが、産業社会が急速に巨大化し複雑化してゆくにつれて、それはより没理念的な管理技術へと変貌してゆき、人間集団の運営方式としては必ずしも有効に機能しなくなって来る。つまり現象的に目の前にある reality のみをしかも「なめらかに」(cf. “An ordered garden, sweet with unity, That is my dream; my Smooth Society.<sup>15</sup>” II, ii.) 処理しようという保守的秩序感がすべてのものに優先する結果、本来どうあるべきかという倫理的観点よりは、手続き上合法でありさえすればよいという判断がより重視され、to be ethical よりは to be legal であるのみを求める風潮が生まれて来るのである。(cf. “I wouldn't say you're asked to set things right... If folks suspect their leaders, law breaks down. You'd help destroy the very law you love.” II, ii.) アメリカの場合、その歴史的成立過程からして、平均して非常に高い



市民の政治意識と建国以来の理想である democracy という理念に支えられて議会制度は順調に発展して来たのであるが、史上その例を見ないほど高度に発達した巨大社会へと膨張してしまった今日、この政治形態そのものがいろいろな面で行きづまりを見せ始めて来ているのである。たとえば立法府である議会が parliamentary cabinet でない事もあって、たゞでさえ強大な権限を有している行政府に対してその抑止機能を十分に発揮できず、checks and balances の原則がくずれてしばしば大統領を長とする政府が独走する、という事が起こって来る。その上議会は伝統的に民主党が優勢であるから、Democrat の大統領の時にはこの傾向がなおさら強調されて出て来ることになり、まして Lyndon Johnson のように長らく上院の floor leader をつとめて議会の表裏にわたって知りつくした人物が、議員や選挙民に対して俗耳に入りやすい、national interests を最優先させる policy を掲げて議会操縦にのり出す段になるとまさに議会は骨抜き同然であり (“... he made it law for congressman That they could say no more than yea or nay.” V, i.), Opposition Party として正しく機能すべき Republicans も cheap government であるべき事を要求する以外は徒らに me-too-ism に墮してしまって、伝統的な二大政党政治が実際には一党半政治である、とさえいわれる程なのである。Kennedy 時代にあれほどはげしかった filibustering が Johnson の就任以来たえて行なわれていないという事も、“LBJ Seminar” といわれる彼独特の執拗な事前工作と個人的説得によるものとされているのである。 (“I know how to deal with people.” I, ii.)

内政問題においてしかり、ましてこと外交政策となると、大きな敗戦を経験していないために、国民全体として自国の外交方針に対して関心がうすく、その上元首自らが外交の直接指揮をとるといいうわゆる「元首外交」であるため、なおさら直接的な批判を避ける風潮があり、加えてそもそも countermeasure はあっても本当の意味の policy はないとか、対等同盟

の経験がないために “arrogance of power” がむき出しになるとか、宮廷外交の歴史がなく砲艦外交しか知らない、とか云われるくらいに外交経験に乏しいお国柄もあって、大統領個人のよかれあしかれ強烈な個性が有効な批判もないまゝに、アメリカの外交政策に直接影響を与えてしまう結果になっているのである。

こうした内政外交を通じて見られる無原則な行動主義、ヤヌス神と綽名されるほどの inconsistency に対してももちろん批判がないわけではない。だが Radicals から Moderates に到るさまじまの色合の Doves, 場合によっては、中道右寄りの Dawks, 或は、典型的な lone wolf といわれる Senator Morse (“I must be off. I have to make a speech in. Some college town where someone’s planned a teach-in.” II, iii.) までも含めての議会内部の批判勢力は、第三幕二場に巧みに satirize されているように日ましに力を得て来ているとは云うものの、権力主義者特有の非寛容 (“MacBird permits no critics from within.” II, i.) の前に完全に無力化してしまっているのである。 (“No one here dares check him.” II, iii.) 一方ふつうの知識人の目にはこのような対立も、西部の新興軍需産業と石油資本対東部の産業と金融資本の主導権争いであり、いわば一種の代理戦争であるとしかうつらず、この二十世紀後半の独裁者、民主主義機構のものと合法的な tyrant, まさに現代的な悪の象徴であるこの政治家に対する彼等の反応は、従って始めは当惑から、ついで怒りへ、そしてそれがまことに legal な存在であるがゆえの否定、抹殺の困難さから、次第に挫折感、無力感をうみ、ついには一種の cynicism から静かな絶望へゆるやかな nihilism へと転化して来たようにおもわれるのである。

computer 文明のもたらす dehumanization と、高度に発達した巨大社会の生み出す身動きのならない膠着状態、ゲームの理論に云う「四人の dilemma」がこうした逃避のメカニズムに拍車をかけているのであるが、そもそも倫理的であろうとする事自体が今日の時代ではとうてい強い社会

的エネルギーとはなり得ないのだ、と考えて今や沈黙してしまった知識人達のこのようないわば“neo-nihilism”に対して、なお頑強に敗北する事を拒否して、legalであろうとなかろうと、あくまでも原則に対してつよく ethical でありたいというエネルギーが実践へ転化しようとする時、こゝにあたらしい一つの anarchistic な attitude が生まれて来る。Mac-Bird はまさにこのような状況を背景に背負って生まれて来たのである。

ある社会においてそこに働らく一切の政治的な支配力を除去して、自由人の自由な結合による社会を最高のものとする考え方は古くから多くの文学者がさまざまの形で発展させて来たものであり、そもそも文学はその自発性と権威の否定のゆえに本来 anarchistic な側面を内包しているとも言えるわけである。そして nihilism が権威に対する反抗自体を目的として単なる否定のための否定に終わっているのに対して、anarchism は権威の否定によって、自由を積極的に獲得しようという行動への意欲という点でより実践的であり、ともかくも生産的であるといえよう。ただその行動的な側面が手段をえらばぬ性急さと共にしばしば誤解されて一種の無統制的な暴力主義と混同されたり、理想社会における財貨の生産と分配の手段をどう考えるかという点で communism と弁別し難く接触したり、また「自然への同情」の提唱のために、単なる原始状態への憧憬にすぎない Rousseauism と見誤まれたりする事が多いのであるが、元来 anarchism は高度に倫理的な一つの発想であり、現実に対する怠情な妥協を排してあくまでも原則に忠実であろうとする厳格な態度であり、人間の意識内部の変革をすら目指す一個の哲学なのである。たとえば、一切の権力を社会悪の根元であるとして否定するといっても、正統派無政府主義では「自らの内にある国家」、「われ、ひととの関係における国家」の否定であり、人間同志の相互理解と生活態度の変革によって漸進的に理想を実現しようとする事をその本領としているのである。アメリカにおける New Lefts が前後左右すべての権力を否定することから始めたその姿勢はその意味ではまさ

に anarchistic な attitude であったわけであり、*Macbird* の作者も自らそのごとく認めると否にかゝわらず、正しくこうした意味での “neo-anarchism” の系譜に連らなるものと見る事が出来よう。こゝで前後左右というのは、まず Johnson 政権の power-policy と Johnson 個人の権力主義に対して、政府の中央集権的官僚機構に対して、Old Lefts の膠柱的な権威主義と保守性に対して、Marxism の集権主義と無謬性の主張に対して、Communists の党派性と反革命に対して、議会両院の示す没倫理性に対して、そして最後には労働組合の脱革新性と労使癒着に対して、徹底した反権力的、反体制的抵抗を示している事を云うのである。*MacBird!* において三人の witches を労働者と Black Muslim と Beatnik の姿に紛装させた事はその意味で甚だ興味深くかつ成功しているといえる。作者もその一人である Free Speech Movement が奇しくも “university” を “multi-versity” にまで巨大化することを試みた官僚的統制技術の専門家である Chancellor Kerr のお膝下である California 大学からはじまった事も甚だ皮肉な事ではあるが、徴兵忌避から市民的不服従、非暴力直接行動、conscientious objection と escalate して来たアメリカの学生運動が、元来その twin brother であった beat generation や hippie たちの free sex, SLD, Zen cult, marijuana 等々と訣別して積極的な社会参加を始めたときから、その文明批評的な側面や逃避的な態度をすて、実践行動の上で Black Power と交差して来たわけであり、この Beatnik witch と Muslim witch が一緒になって Worker witch の教条主義、事大主義、保守性、旧弊な公式理論 (“...History teaches us.... I will show you real revolts.... Behold the great rebellions of the past.” IV, iii.) をさんざんにからかっているところはまことにすばらしい caricature になっているのである。

こうした反体制的な動きの中の anarchism を、小市民的で非現実的な Utopia 思想であると非難するのは当たっていない。それはたしかに eph-

meral で非体系的な、或る意味で永遠に未完の思想ではあろうけれども、その故にこそ、anarchism はある体系的組織に潜在する欠陥をすどく指摘し、一つの体系的思想の停滞と膠着を打ちやぶる事が出来るのではなからうか。ある機構や思想が最初の頃の発展成長への柔軟なエネルギーを次第に失なって、硬直と教条化がはじまる時、その保守化と妥協的態度にむかって敗北を承知の上で、原則に忠実なれ、つよく倫理的であれと絶叫するものは anarchist しかない。スペイン市民戦争で人民戦線内部の強力な革命的エネルギーでありながら、おなじ戦線内の Stalinist-communists に結局は粛清されてしまったアナキスト・グループの運命と、裏切られてスペインを去った George Orwell の怒りとを今一度我々は思いおこすべきであろう。

一方では連邦政府の集権主義に対抗して地域社会の利益を守ろうという州権擁護のうごきがあり、それにかからませて低次元の nationalism を鼓吹する chauvinism の突き上げがある。他方では technoelectronic age の到来といわれ乍ら walking computer と綽名された McNamara の退陣に象徴される巨大社会の矛盾の急速な拡大がある。それに翻弄され乍ら国民全体の充分な納得もないまゝに、ethics をすて、legality からだけで national consensus をおしつけようとしたり、無批判に necessary evil を肯定したりしている以上、政府と国民の間の credibility gap は credibility canyon へとひろがってゆき、事態はまさにオーウェルの混乱へと展開してゆくものとおもわれる。その間にあって、本来 anarchistic な側面をもつ政治諷刺が発言の権利と場を獲得する事は、いわば必然の現象であり、文学が社会に commit する有効な形式として今後ますます質的量的に拡大してゆくことであろう。MacBird! の成功はそうした political satire の時代の到来を告げる開幕のベルであるとも見る事が出来るのである。

加藤周一氏は「MacBird! の狙った敵は決してジョンソン個人ではなく

米国大統領である」と指摘しているが、これはやはり Johnson という矛盾にみちた複雑な個性が、内政外交をとはずアメリカの政治に強く投影しているところに問題の発生があり、Macbeth がまさに witches に予言されたように、歴史的な三つの“if”の重なりから彼が米国大統領になってしまったところに今日見るアメリカの悲劇があり、その意味で *MacBird!* の狙った敵は Lyndon Johnson その人と見なければならぬであろう。

では *MacBird!* はついに悲劇なのか、或は喜劇なのか、*MacBird!* は Shakespeare の悲劇 *Macbeth* を台本とする諷刺喜劇であるが、そこに描かれているのはアメリカの悲劇である。小田島雄志氏の指摘のように、悲劇の主人公はよかれあしかれ idealist でなければならない、とすれば、*MacBird* は三たび地獄へ墮ちるとも、悲劇の主人公にはなれない事になり、おまけに木島始氏によれば、そもそも喜劇は Aristophanes のいくつかの作品にみられるように、元来反戦文学に始まるそうであるから、結局これは喜劇という事になるのであろうか。

註1. Barbara Garson, *MacBird!* (London: Penguin Books, 1967)

- なおこの作品は上記の Penguin Modern Playwrights シリーズにその第四篇として収録される前に、the Grassy Knol Press という架空の出版社から地下出版物として出されたもので、のちに Glove Press の Evergreen Series に収められた。各版により act, scene の分け方、細部の詩句に若干のちがいがあがるが、こゝでは Penguin 版に従った。
2. Mrs. Johnson は旧姓 Claudia Alta Taylor. 子供の頃黒人の乳母が愛称として Ladybirdと呼んでいたものを、Lyndon Baines Johnson が彼女と結婚当時すでに LBJ の abbreviation で知られていたもので、同じ頭文字に合わせるために Lady Bird Johnson と名乗るようになったといわれている。
  3. Chief Justice of United States, Earl Warren を長とする故ケネディ大統領暗殺事件調査委員会は事件後一週間目の1963年11月29日に大統領命令によって設置され、10ヶ月後の1964年9月28日報告書を発表した。その「Oswald 単独犯行説」はいろいろな議論を呼んだ。
  4. *Some Unanswered Questions* の Fred Cook, *Inquest* の E. J. Epstein, *Rush to Judgement* の Mark Lane など上記 Warren Report の批判者達がいわゆる第三弾の発射地点と考えている場所で、はじめこの *MacBird!* の架空出版社の名前に使われた。cf. 註1.
  5. Adlai Ewing Stevenson (1900-1965) 1952, 1954年度 民主党選出大統領候補、国連大使。1965年7月14日、ロンドンにて客死。(cf. 本文, II, iii.)

6. Wayne Lyman Mrose 民主党所属上院議員.
7. Eric Frederic Goldman. Johns Hopkins 大学歴史学教授. Special Consultant to the President of U. S.
8. Francis Spellman (1889-1967) 1946年以来枢機卿であった。なお同枢機卿はスペイン内乱に際して Franco 政権を支持し、1950年代始めには McCarthyism を弁護し、また南ベトナム大統領故 Ngo Dinh Diem 擁立に尽力した。Armand Gatti の *V Comme Vietnam* の中でも政治好きの猓下として satirize されている。
9. Lyndon Johnson は Texas 州 San Marces の Southwest Teachers College を卒業した。
10. 第28代大統領 Woodrow Wilson にはじまる President's Press Interview は立法司法行政の三権につぐ the Fourth Government とさえ呼ばれるほどの機能をもつものとされていた。F. D. Roosevelt は在任中998回の press interview を行なったといわれている。現在では1967年2月4日以来長らく行なわれていなかった。なお *Observer* 紙の Michael Davey は President Johnson は “press relation” と “public relation” を混同して考えている、と指摘している。
11. Lyndon Johnson は1948年に下院議員から鞍替えして Texas 州の上院議員に打って出、対立候補を87票差で敗って当選したが Jim Wells County ほかいくつかの投票所で不正投票があったといわれている。
12. Hunt Oil Co. の H. L. Hunt ほか Texas 州の oil producers との関係を想起せよ。
13. Johnson は1940年代初期には自ら “New Dealer” と称していたが第二次大戦以後はそのことをつよく否定している。
14. cronies group の Bobby Baker, や Werner Herbert Krotz の corruption case, Walter Jenkins の scandal など White House 周辺の grafters とのむすびつきなどを云う。
15. cf. Great Society, the President's report on the State of the Union delivered to the Congress on January 4, 1965.
16. D. Wilson の言葉に Hamlet と Macbeth の性格を比較して、「一は決して始める事の出来ぬ男であり、他は決して打切る事の出来ぬ男である」と云うのがある。1968年3月31日の Johnson の大統領選挙戦不出馬声明以後もなお継続している「北爆」を想起せよ。
17. Newsweek, March, 18, 1968 p. 9 “The Army major's Orwellian pronouncement at Ben Tre— It became necessary to destroy the town to save it.”